

人間の知恵と神の知恵

使徒パウロは1章18節以下で、使徒的宣教の中心である「十字架の言葉」即ち十字架において表されたキリストの福音にコリント人の心を集中させ、この世の知恵と対比させながら十字架の福音が神の深い知恵に基づく救いの御業以外のなにものでもないことを力強く語る。

ユダヤ人とギリシャ人は、いわば、人類を代表する二つの民族であり、またユダヤ人の知恵(宗教的知恵)とギリシャ人の知恵(哲学的知恵)は人類を代表する二つの知恵である。コリント人への手紙のこの箇所において使徒パウロは、人類が築き上げた最高の知恵ともいべきこれらの知恵が「十字架の言葉」すなわち「イエス・キリストの十字架と復活の福音」といかに相容れないものであるかを指摘する(18～25節)。

自らの知恵を最高のものと誇ったこれらの知恵は、皮肉なことに、人類救済のための神の知恵たる「キリストの十字架」を考えることも、受け入れることもできなかった。「十字架の言葉」は彼らにとってはつまずきで、嘲りの対象でしかなかった。これが、使徒パウロが福音を宣べ伝えた至るところの旅先で人々から受けた反応であった(使徒行伝17:32参照)。

そして、それは今日においても変わりがない。人々は依然として十字架の福音につまずき、あるいはそれを「おろか」とするのである。私たちがまたかつてはそのようにキリストの福音を愚かとして笑い、受け入れようとはしなかったのである。

キリストの十字架の福音は人間の知恵によって考え出されたものでもなくまた人間の知恵によって生み出されたものでもない。それは神の深い知恵による。すなわち、この世の知恵が愚かとし、弱さとしてさげすむ、キリストの十字架の死という、まさにそのような方法で、神はご自身のみこころにかなう者を救うことをよしとされた、そしてそのことによって、自らの知恵を誇り知識を誇る人間の知恵とその傲慢を逆にさばかれるのである。

だから、この世の知者やこの世の学者やこの世の論者たちが、自らの知恵を誇り、自らの賢さを主張し、自らの論理の巧みさを見せびらかそうとも、私たちがまた使徒パウロとともに、次のように大胆に主張するのである。

『ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人にはおろかなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです』と(22～25節)。

別の手紙で、たとい人が愚かとしようが嘲笑しようが、私たちは福音を恥じとはしない、なぜなら、それはユダヤ人をはじめギリシャ人にも、すべて信じる者に救いを得させる神の力だからである、と大胆に語る使徒パウロの言葉がここで思い出される(ローマ1:16)。